「オレの歌は人生の副産物です」

松山千春の五つのこだわり

〈前号からつづく〉

TBSラジオの「翔んでるナイト」の林美雄氏との対談から

千春　オレが生れたとき足寄の町なんてチンケなもんでね、いまでもチンケだが、まわりみたって山ばっかりだし、向うの方に阿寒の山がボコンボコンとみえてて、冬になると雪におおわれるし汽車も停つちゃうみたいなそんな町だし、高い建物つたら別になないし、二階建が精いっぱいだったし、そんなとこで住んでた男が二十四年間住んで、たとえば東京で、ビルの谷間でね二十四年間住んだ男、ものの考え方とか生き方とかおのずと変ってくると思うんですね、ある程度ね基本的なものは変らないのかもしれないけど、変ってくると思うので、そういうものをオレは大切にしたいと思ってるんですよ、北海道を大切にするってことは自分自身を大切にしたいなあとそういう風に思ろから北海道にこだわってるし、オレ北海道で生れたことに対して誇りをもっているんですね、それにラッキーだったなあと思うし、北海道は開拓されてから百年ナロッとなんですね、だから自分の手でいくらでもできるわけですよ、北海道にヒーローはいないわけですよ、北海道のヒーローはだれだっていったら出てこないでしょう、クラークきんじゃないですよね、だれでもヒーローになれるわけですよね、そういうなかで生れたことって本当に幸せに思いますね、このなかで松山千春という男を育いていきたいと思うし、いったい自分は大きくなれるか試してみたいと思います、そのために井のなかの蛙じゃいけないと思うし、そういう意味で金儲をコンサートでまわったりしてあちこちの人からいろんな情報を得たり、いろんなものを見聞きしていろんな人にあって、それで自分の脳のなかで消化して、それでオレはこれだみたいな感じで作り出して生み出してみたいと思うんですね

林　北海道は四季の変化のなかで梅雨（つゆ）がないでしょう

千春　ないです

林　あの梅雨っての三十七年間おそらく一カ月ガマンするなにかが栄養になってるんじゃないかという気があるんです、当げないという、雨雨を経験してるという

千春　やっぱりね、東京の人にもっともっと自分の生れたマチに対して誇りをもってもらいたいし、堂々と胸をはって手続ら北海道の山のなかだろうぐらい思ってね、そんな田舎へいなかゝからよく出てくるな電気通ってるのかぐらいいうのが出てきていいと思うしそしたらオレたちはオレたちもっていくらでも反論するしバカヤローこの野郎お前ら軽薄非沢、自然を楽しみにいくんだ、そんなものはイタクなんだ、オレたちどれだけゼイタクだかわかるか一年中山んなかにいるモ、そんな風にいってやりたいしね、そんなことが金儲あちこちから出てくればおもしろい、音楽に限れば音楽ジーンというものができるだろうし、文学にしてもいろんなものにしてもあちこちから力が湧いてくれればすごいものができるような気がするんですけどね、そんなかでオレが北海道で生れたということはすごいラッキーだと思うんですね

林　割と狭間に誤解されている部分もあるみたいですね

千春　そうですね、オレは田舎が一番でね、都会で住んいる奴の気がしれないみたいなそんな風にとられているけど、そんなことないです、田舎であろうと都会だろうと誇りをもって生きたいですね

林　これから弁護士になります、きょうで四日目です、たばこをかなり吸うんですね、ヘビースモーカー

千春　そうですね、缶コーヒーとたばこがあれば一日もてるっていろタイプですからね、飯は三日くらい食わなくても大丈夫です

林　ロレツたり、トチツたり

千春　深夜放送やってでありますね、舌がしびれてくる、わかるでしょう、林さんも相当ヘビーだから

林　酒かたばこかというと

千春　たばこやります

林　酒は

千春　酒は昔は飲んでました、北見でバッチリ飲わりました、板前さんみたいなこともやってましたから仕事おわってからあがり酒なんて、歌を歌うようになってからせめて声だけでも大切にしたい

林　たばこと女は

千春　たばこってことだね

林　子供のころから年上の女性からも同世代からもモてたタイプでしょう

千春　もてたっていうかね、よく女の子にいわれたんだけど、一度はオレにあこがれるんだって、頭もまあまあだし、スポーツもできるし、そうすると一応あこがれる対象なんだってところがあこがれるだけでおわってしまうんだってオレみたいなタイプは、ああいう男にくっついたらロクなことはないって

林　私の人生メチャメチャだって

千春　みんなさけていってしまって、それほどでもないですよ

林　うちの同僚でこよなく女性を愛する同世代がいるんですが、本だに好きになると毎日でもあいたいという気力と情熱にはかなわない

千春　サイクルは短いの個でるはオレと、オレもそうなんだもの、いい女だと思うとすべてを知りたい、愛な意味でなくて可愛いさに火がついたようにパーッと突っ走るんだけどダメですね、自分でも若すぎるんですね

林　年とってから狂うよりいまのうち狂っといた方が

千春　バカなこといわないでください、別に狂ったわけじゃないですから 純粋な気持で追い求めている感じです、まだ若いからタイプはこれだと決めなくてもいいと思うんですよ、いろんな気とつきあってみていろんな女かちいろんなものを吸収してお互いに吸収しあって、また一歩一歩上っていくのがいいんじゃないですか

林　女性のしぐさでこの女はすべてイヤだなって

千春　自分が女だってことを忘れるようなしぐさねたとえば自転車に乗って子供を背中にガッチリ股をひらいて、ああいうのをみたらもうダメだ、パパアでも品のいいのはシワクチャでもキチンと髪をそろえて志は女なんだという部分をもってる人好きですね

林　花札ツアーをやったお世話さんは一応そろえるというが、いろいろ本を読まして頂くと岡林信康、加川良、こういった方々を小学校時代に聞いたんですって

千春　岡林さんは小学生のときにうちの方までコンサートにきましたからね、そういうの見て聞いてスゴイ歌うたうんだなあと思いました、岡林さんが山へかくれたりして、そんなとき加山良さんが出てきて良さんの歌を聞いてスゴイなあと思って、そんなものをエッセンスにして、オレはオレの歌をうたうぞみたいに出てきて、イザフォーク界に入っていろんな歌うたってきたんだけど、なかなかオンが消えてたフォーク界というのがみえないんですよね、なにかしら芸能界みたいなのがデフカクふんばっていて、オレはフォークやってる筈なのにいつまにか巻み込まれそうだみたいな感しがして、そんなときにパーとみたらいないんですよ、フォークをやってる人たちが、岡林さんがやっと逢うところから出てきたが良さんはレコード会社ないんだという、契約切れてのは、誰れないとか

千春　単的にいって、みんな松山千春といったらあいつテレビに出ないんだもなという感じ、なんでそんなものにこだわっているんだみたいなものがあると思うんです、オレたちの歌はあくまでも生活の副産物なんでタイイキであったり涙であったり喜びであったりそれをオレたちは歌で表現するわけですね、自分が歩んできた人生はこういうものです、これからこういうものを求めていくんですとか、そういうものが歌に結晶されてるんですよ、そういろ歌をうたってる人間がいわゆるポリシーをどんどん打ち出している人間が可愛い子ちゃんタレントとかそういう人たちというものだけは誤りたくないですね、もしこのテレビ業界とか歌う人たちがもっともっとポリシー（生き方や考え方など）をぶつけてくるならオレはオレのポリシーでその人たちと同じ番組のなかで同じ土俵に登って歌をたたかいたいというか歌いかわしたいと思うし、オレはたしかに一人だから小さな力かもしれないけれど、やればいつかはできるような気がするしね、やらないよりやった方がましなような気もするし、これからどうなるかひとつみていてください

林　なかなかいま野球にこってるようですね

千春　バッチリです、かうだはね、動くうちに思い切り動かしておいた方がいいですね、ガンバって連勝の記録を伸ばしていきたいと思います

林　私はいま音楽専門なんです

千春　本当に今週は長々と有難うございました

林　こちらこそどうも、松山千春さんでした

「木枯しに抱かれて」を聞いて

十一月二十七日付の北海道新聞で音楽評論家の飯田康博氏は、松山千春七枚目のアルバム「木枯しに抱かれて」をつぎのようにとりあげています。

前のアルバム「浪漫」で今なぜラブソングなのかと問い直した。このアルバムでも、なお通い続けている痛ましさの原点に涙、思いあふれる感情にも、青春の愛と哀にラブソングの型をかえてつづった。そこには少女のような幼い純な感性で向かい合う素朴な言葉が連なる詞。いったん我の歌になると、色がにじんで強度にも彩りが増えて来る。そして、裾野が広がり、おもいがふくらんで行く。千春の声とメロディーのなせる技なのか。現期を強いて耳を傾けると、そこに見失いかけた人の感性が戻って来る。そこには自然に包まれて楽面の美しさを感じる時のように、だれにも差別しない自然の愛を見ることが出来る。

なお、このアルバムは十一月二十一日に発売と同時売り上げベストテンの第一位となりましたが、前二枚の「続承転結」と「浪漫」も初登場で第一位はオリコンの調査で新記録といわれています。

年末にテレビ出演

年末恒例ともいうべき千春とそのスタッフによる、自主制作のドキュメンタリーのテレビ番組が、十二月二十八日（日曜日）午後二時十五分から一時間三十分にわたって、北海道はSTVから、本州はTBSから放映されることになりました。

十五日の旭川市のコンサートを打ち上げしたい部作にとりかかることにしていますが、内容はコンサートはどのような過程をへて組み立てられていくかを描いていって初日の幕があくまでのドキュメントとなる予定で、昨年の場合はテレビ制作せてつくられた形でしたがこんどは自主制作らしく別色の映画評論家おすぎさんのシナリオによって撮影することになるもようで秋のコンサート「風をうけて」には同氏が同行して密着取材をつづけていましたが、どのような映像が展開するか注目されます。